



UTCMES ニュースレター

VOL.9 2016

1. 国際ワークショップ“Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Groups in the Middle East” 報告	1	(3) “Honour Crimes and the Demonization of the Palestinian Woman”	
2. 多宗派共存の現場から：レバノンのキリスト教宗派コミュニティの調査	3	(4) 中東・北アフリカの少数派再考	
3. 女性の地位に関する日本・スウェーデン・オマーン三極ワークショップ	5	7. 研究案内	12
4. カタル・ドーハ研修報告：ジェンダーと女性性／男性性の観点からの考察	6	(1) インド・ビハール州パトナーのホダーパフシュ東洋図書館調査(2016年)	
5. “When Dissonance Becomes Unexpected Harmony: How Artists Are Re-Imagining Saudi Arabia’s Culture and Society” 報告	8	(2) ラクダに火器を載せる話	
6. 講演会・ワークショップ報告記	9	(3) イラン文書調査雑記	
(1) エジプトとイランの歴史と社会		8. 留学生記録	16
(2) 中央アジアとトルコの歴史と文化		(1) オマーンでの留学を通じて	
		(2) ダマスカスから、ここは日本	
		9. そのほかの便り	20
		(1) 日本・オマーン協会関係者の駒場博物館オマーン展「Omani Corner at Komaba」等訪問	
		(2) 日本・オマーン協会からのオマーン関係遺物の受託	
		(3) サウジアラビア・キングファイサルセンター関係者来校	
		10. スタッフ・発行者情報	20

1. 国際ワークショップ“Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Groups in the Middle East”

「脆弱性と強靱性：中東における非多数派集団の社会環境」

居阪僚子

三代川寛子（人間文化研究機構地域研究推進センター）

高橋英海（東京大学大学院総合文化研究科教授）

日時：2016年3月10日（木）
9:00-14:40

場所：中東研究日本センター（バイルート）

主催：東京大学中東地域研究センター（UTCMES）、中東研究日本センター（JaCMES）

登壇者：浜田華練（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

居阪僚子（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

近藤洋平（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員）

桑原尚子（福山市立大学都市経営学部准教授）

阿部尚史（東京大学大学院総合文化研究科特任助教）

コメンテーター：

辻上奈美江（東京大学大学院総合文化研究科特任准教授）

アントラニク・ダケシアン（ハイガジアン大学准教授）

レイ・ムアウワド（セントジョセフ大学研究員）

共催：科学研究費基盤（B）「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」（研究代表者：高橋英海）

東京大学中東地域研究センターは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所附属の中東研究日本センターとともに、“Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Groups in

the Middle East” と題する国際ワークショップをバイルートにおいて開催した。上記の登壇者が各々研究報告を行い、現地の大学からダケシアン氏、ムアウワド氏を招き、本センターの辻上奈美江とともに各報告に対しコメントをしていただいた。

以下、各報告の内容とそれに対するコメント・質疑を簡潔に紹介する。

● 浜田華練

「14-15世紀のキリスト教徒・ムスリム間対話におけるアルメニアのキリスト論」

6世紀にカルケドン信条を否定して以来、アルメニアの神学者は正教やカトリックというキリスト教徒との神学論争を行ってきたが、イスラームの影響が拡大してくるとムスリムに対する反駁も見られるようになった。14-15世紀を代表するアルメニアの神学者であるタテヴのグリゴルは従来の議論を受け継ぎながら、独自の論述法や用語を用いることでムスリムへの反駁を試みた。本報告ではタテヴのグリゴルの議論を、彼以前の反カルケドン派を代表する神学者のキリスト論と比較しながら分析・検討した。コメンテーターのダケシアン氏

からは、グリゴルの神学論をキリスト教以前の異教への反駁を行ったコルブのエズニクとも比較検討してはどうかという提案があった。さらに、グリゴルの著作の目的として一般のアルメニア人の教化という側面があったこと、アルメニア教会内の対立という背景を踏まえた上でグリゴルの立場を明確にする必要があるという指摘もされた。

●居阪僚子

「19世紀北コーカサスにおけるロシア正教会の聖職者：その活動とムスリムに対する姿勢」

18世紀半ばより、ロシア正教会の聖職者が北コーカサスにおいて宣教を開始したが、この活動の背景には、スンナ派イスラームが多数派であり、オスマン帝国との境界領域であった北コーカサスへの影響力を拡大するという狙いがあった。19世紀には北コーカサスでロシアへ反発するムスリムによる戦争が長期化する中、コーカサスの人々を改宗させるためのコーカサス正教復興協会が設立された。この協会の聖職者が残した報告書をもとに、当時の聖職者がムスリムたちにどのような宣教活動を行ったかを検討した。ムアウウド氏からは、本報告は現代のロシア正教会がシリア他の中東で行っている活動の分析にも貢献する重要な研究との評価がされた一方で、ロシア正教会の聖職者が同時代にエルサレムなどで行った活動と比較する必要があること、また正教会の聖職者がイスラームを批判するのは「当然」であるという言い方には問題があることといった指摘もなされた。

●近藤洋平

「分離から共存へ：近代イバード派の場合」
ハワリージュ派から派生しオマーンな



どの地域に広がっているイバード派は、伝統的に神によって救われるのは自らの宗派のみであるとみなし、他のイスラーム諸派は異教徒と同様地獄に落ちる定めであると主張してきた。しかし、19世紀後半から他派との分離傾向は弱まり、パン＝イスラーム主義やイスラーム世界の連合に関する議論が現れるようになる。例えば、1920年代のイバード派イマームのアル・ハリリーはイスラーム世界の連合に歩み寄る発言を残している。報告者はこうした19・20世紀に記された著作から、イバード派が他の宗派や異教徒にどのように接していたかを分析し、彼らの宗教的共存への試みを明らかにした。

●桑原尚子

「憲法と宗教的属人法の領域：「差異への無理解」と「完全な宗教的自治」を越えられるか？」

本報告では、国がどのようにして文化的・宗教的差異を尊重し、女性などの弱者を保護するかという論点から、属人法の範囲と憲法の関係について検討された。国家-宗教的コミュニティ-個人という関係になっているレバノンなどにおいて、宗教コミュニティの中の弱者の保護に関してとられている法的アプローチを分析した結果、一部の市民権は属人的な面では認められるが法的には認められていないという状況が確認された。コメンテーターの辻上氏からは、国家-コミュニティ-個人というモデルは国の視点と人々の視点では異なるものになるのではないかという指摘があったほか、ダケシアン氏からはレバノンでは宗教コミュニティごとに属人法のレベルが異なることがあるという指摘が行われた。ムアウウド氏からはレバノンでは宗教が異なる人同士の婚姻が認められないというケースが紹介され、フロアの参加者から異宗教間での結婚をした際に宗教コミュニティでは結婚が認められたが役所で認可がおりなかったという証言が提供された。

●阿部尚史

「イラン地方社会におけるアルメニア人：ムスリム多数派地域における宗教マイノ



リティの生き残り」

サファヴィー朝・ガージャール朝期のイランにおいてムスリムの宗主権下にあった宗教マイノリティとしての在地アルメニア人についての研究は未だ不十分である。本報告ではペルシア語史料に基づいて、マーカーやタブリーズのアルメニア人有力者と政府当局の関係について分析が行われた。史料からはイランの制度を理解した上で、税制や宗教コミュニティについての請願を提出し希望を叶えようとする現地のアルメニア人有力者の姿が読み取れた。また、ガージャール朝期にはロシアとの対立が激化した結果、アルメニア人に対して税制上の優遇など新たな勅令が出されるようになり、イラン政府側もムスリムとアルメニア人を共存させようとしていたことが明らかになった。ダケシアン氏からは、当時の国境は常に変化しており、それに伴って様々な配慮がなされたこと、オスマン帝国におけるハンガリー地域などで類似した状況があることなどのコメントが出された。

●三代川寛子

「コプト博物館の設立と国有化」

エジプトでコプトの有力者によって1910年に設立されたコプト博物館は、1931年に国王命令で国有化されたが、本報告ではこれに伴い発生した論争に焦点を当てている。ムスリムや一部のコプト教徒からはコプト博物館は考古学博物館、イスラーム美術館、ギリシア・ローマ博物館に次ぐ第四の博物館とみなされ、エジプトのナショナルヒストリーの一部としてのコプト史という位置付けが主張された。一方でコプト博物館の入口が教会の中に位置したこともあって、博物館の収蔵品は「教会の宝」とする人々からは、「イスラ

ム政府」がキリスト教の文化を保護することへの反発も起こった。ムアウウド氏より、この論争はイスラーム社会の中で生きるキリスト教マイノリティの恐怖心を示す好例であるとのコメントとともに現在の状況を確認する質問があった。現在は博物館の入口も変更されて教会との切り離しが進み、博物館を国立と認める人が多いとのことである。

●高橋英海

「バルヘブラエウスの歴史書に見られる災厄の記述」

13世紀のシリア正教会の聖職者であり歴史家でもあったグレゴリウス・バルヘブ

ラエウスは1262年にモスルがモンゴル軍によって包囲された際に教会の成員や聖遺物がアルビールの教会へ避難した事件を記している。このキリスト教徒の苦難の歴史は繰り返されており、数年前にもモスルからアルビールへの聖職者・聖遺物の避難が行われている。また、報告では2011年に中国の福建で発見されたマニ教の写本には、聖ゲオルギウスへの祈祷文と思われる一節（吉思呪）が見られたことが紹介され、宗教が混交した状態でキリスト教の要素が残っていることが明らかにされた。ここでは中東とは異なった形で生存戦略が伺える。ムアウウド氏からは中東的な存在である聖ゲオルギウスが中国

まで伝播し、他の宗教と混交したという事象は非常に興味深いというコメントと、内戦後は教会にあるレバノンの母像のもとへムスリムも登るようになり、新たな宗教共存の形が現れている状況が紹介された。

最後に、コメンテーターのダケシアン氏からレバノンのアルメニア人コミュニティの歴史と現状についての簡潔な紹介があった。1920年代にはキリキアからカトリコス座が移り、周辺が不安定な状況の中「アルメニア・ディアスポラの首都」として重要な役割を果たしているとのことである。

2. 多宗派共存の現場から： レバノンのキリスト教宗派コミュニティの調査

東京大学大学院総合文化研究科
博士課程
浜田華練

報告者は、科学研究費基盤(B)「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数民族と弱者に関する総合的研究」(研究代表者：高橋英海)の研究協力者として、2016年3月8日から15日まで、中東レバノンへ出張した。イスラーム社会における「弱者」あるいはマイノリティに関する研究を行う当プロジェクトは、JaCMES(中東研究日本センター)におけるワークショップの他(冒頭居版稿参照)に、レイ・ムアウウド氏(セントジョセフ大学)、アントラニク・ダケシアン氏(ハイガジアン大学)など現地研究者の協力を得て、レバノン国内のキリスト教徒コミュニティの調査・視察・聞き取り等を行った。その概要は以下の通りである。

レバノンにおける宗教指導者の役割

レバノンでは、政府公認の18の宗派が存在し、人口数に応じて各宗派に議席が割り当てられるほか、それぞれの宗派が独自

の家族法に基づいて裁判を行う権利を持つなど、行政・司法の場で宗派が重要な単位となっている。今回の調査では、马龙派教会のChucrallah-Nabil El-Hage主教とメルキト派ギリシア・カトリック教会のElie Haddad主教との面談を通じて、それぞれの宗派の現状について実際の現場の声を聴く貴重な機会を得た。

面談を通じて明らかとなった両主教に共通する問題意識は、自らが管轄する地域の宗派コミュニティ、特に農村部のコミュニティの人口をいかに維持するかということである。内戦中、地方のキリスト教徒の人口は大きく減少し、内戦後の帰還によってやや回復したものの、近年は経済的な事情やよりよい教育・就職先を求めて都市部や国外へ移住するキリスト教徒が、特に若年層に多い。地方の就職問題は特に深刻であり、主教は毎日信徒から何らかの相談を受けているが、その内容の多くが就職の斡旋依頼であるという。コミュニティを維持するためには、住宅などの生活環境を整えることが大切であるという観点から、Elie Haddad主教は農村部にキリスト教徒向けの住宅を建設する計画を進めてお

り、そのための財政支援を行政に要請しているが、未だ十分な支援は得られていないという。

このように、レバノンの二つのキリスト教コミュニティにおいては、いずれのケースでも宗教指導者は信徒の生活に密着しながらコミュニティの維持に努めると同時に、住民と行政をつなぐ役割も担っていることが明らかとなった。

宗教的／民族的マイノリティの教育・文化事業(アルメニア人の事例)

レバノンの人口の約4%を占めるといわれるアルメニア系住民は、アルメニア教会(非カルケドン派)あるいはアルメニア・カトリック教会やアルメニア福音派教会に属し、言語的にはアラビア語とアルメニア語のバイリンガルである。今回、アントラニク・ダケシアン氏の案内により視察の機会を得たベイルートのハイガジアン大学(Haigazian University)は、アルメニア国外では唯一のアルメニア人によってアルメニア人の教育を目的として設立された大学である。

ハイガジアン大学は、1955年にレバノン在住のアルメニア人の高等教育を目的として設立されたが、近年はアルメニア系以外のレバノン人学生も多数在籍し、講義も全て英語で行われている。また、アル



ハイガジアン大学

メニア本国から同大学に留学するアルメニア人学生も増えつつある。同大学の図書館は、膨大なアルメニア語の図書・定期刊行物のコレクションを有していることから、レバノン内外のアルメニア研究者の重要な研究拠点となっている。

現在、ハイガジアン大学では、我々を案内してくださったダケシアン氏を中心として、ベイルートにおけるアルメニア人コミュニティの歴史を記録するプロジェクトが進行している。ダケシアン氏によれば、内戦を機にベイルート市内のアルメニア人の人口が減少しただけでなく、商業や工芸などかつてアルメニア人が担っていた産業・文化が後世に継承されずに途絶えてしまった。ダケシアン氏のチームのプロジェクトでは、高齢者への聞き取り調査やフィールドワークによって、現在では失われたかつてのベイルート市内のアルメニア人地区の街並み等を再現するという試みも行われており、教育だけでなくコミュニティ・地域社会の歴史の保存という新たな大学の取り組みとして成果が期待される。

難民・移民受入国としてのレバノン

レバノンのアルメニア系住民の多くは、1910年代から20年代にかけて行われたオスマン帝国領内のキリスト教系住民に対する迫害・強制移住から難民として逃れてきた人々の子孫である。

アルメニア人に関連する施設として、今回の調査では上述のハイガジアン大学の他に、アルメニア教会のカトリコス座である聖グリゴル大聖堂とそれに隣接する博物館を訪問した。カトリコスとは、アルメニア教会やその他の東方の諸教会で教会の首長たる人物に与えられる称号であるが、アルメニア教会には現在2人のカト

リコスーアルメニア教会総本山であるエチミアジンのカトリコスと、キリキアのカトリコスが存在し、前者は現在のアルメニア共和国のエチミアジン（ヴァガルシャバト市）に、後者はレバノン近郊のアンテリアスに居を定めている。キリキアとは、13世紀から14世紀末までアルメニア王国が存在したアナトリア半島東南部の地中海に面した地域で、アルメニア王国滅亡後もキリキアのカトリコスは存続し、イラン領内のアルメニア教会はエチミアジンのカトリコス、オスマン帝国領内のアルメニア教会はキリキアのカトリコスに帰属していた。1915年のオスマン帝国におけるキリスト教徒に対する迫害・ジェノサイドを機に、キリキアのカトリコスもまた国外への避難を余儀なくされ、幾度かの移動を経て1930年にベイルート近郊のアンテリアスが正式なキリキア・カトリコス座となった。現在、レバノンをはじめとした中東諸国のアルメニア教会主教区と、アメリカ合衆国内のアルメニア教会主教区がキリキアのカトリコスの管轄下にある。

20世紀初頭までアナトリアにはアルメニア教会・修道院が多数存在し、写本やミニチュールが作成されていた。そうした教会や修道院の多くは破壊されて現存していないが、今回見学したアンテリアスの博物館には運よく破壊を逃れた貴重な中世の写本やアイコン、工芸品が所蔵されており、文化財の保護という観点からもキリキアのカトリコス座がアルメニア人にとってきわめて重要な意味をもつ場所であることがわかる。

アルメニア人のように難民として入国し、のちに定着した人々や、パレスチナ難民、近年急速に流入するシリア難民など、レバノンは周辺国からの難民受入国として重要な役割を果たしている。同時に、ベ

イルートには外国からの出稼ぎ労働者、特に家内労働に携わる女性が多く居住しており、こうした人々の存在が、レバノンの宗教的多様性の在り方にさらなる変化をもたらしている。今回の調査では、ベイルート市内のフランシスコ派教会の聖堂を借りて行われるエチオピア正教の礼拝を見学した。聖堂に入る際はエチオピア正教の慣習に則って靴を脱ぎ、礼拝はアムハラ後で行われる。礼拝に参加する信徒のほとんどが、ベイルート市内の家庭ないメイドやホテル従業員として働く女性である。エチオピア正教は、レバノンにおいて公認されている18の宗派に含まれていないが、移民・出稼ぎ労働者の需要によって礼拝が行われるようになり、グローバル化の進行とともに宗教も多様化するということがよくわかる事例である。

今回の調査では、現地研究者の協力により、レバノンにおける様々な宗教コミュニティの現状を明らかにすることができた。また、今回の研究プロジェクトは現地メディアからも注目され、プロジェクト代表者の一人である高橋英海氏が、フランス語新聞L'Orient Le Jourからの取材を受けた（記事は電子版に掲載。http://www.lorientlejour.com/article/979018）。イスラーム社会におけるマイノリティあるいは「弱者」というテーマは、内戦を乗り越えて多宗教が共存する社会の構築を目指すレバノンの人々にとっては非常にアクチュアルな問題であり、今後も現地と連携しながら継続的にプロジェクトを進めていきたい。



アンテリアスの聖グリゴル大聖堂（アルメニア教会）



马龙派教会主教との意見交換

3. 女性の地位に関する日本・スウェーデン・オマーン三極ワークショップ

東京大学大学院総合文化研究科
中東地域研究センター
客員教授
森元誠二

2016年2月23、24日の両日、スウェーデンのルンド大学でワークショップ“Women Perspective, Conditions and Changes in Japan, Oman and Sweden”が開催された。ルンド大学は1666年に創設され、ウプサラ大学と並びスウェーデンで最も古い歴史と高い格を誇る総合大学である。ホスト役は同大学中東地域研究センター長のレイフ・ステンペリ教授がマリアヌ・ラーナツァ特任講師と共に務め、日本側からは東京大学中東地域研究センターの高橋英海教授、辻上奈美江特任准教授と私に加え、関西大学法学部の佐藤やよび教授、オマーン側からはスルタン・カブース大学のラフマ・マフルキー准教授（修士・博士課程における副学長）、マヌマ・バルーシ教授（観光学科長）が出席した。

この企画は、もともと辻上准教授が2014年の北米中東研究協会年次総会でラーナツァ女史と知り合い、同女史を私に紹介してくれたことに端を発する。当時私は駐スウェーデン日本国大使であったが、モロッコ系スウェーデン人としてルンド大学やストックホルム大学で教鞭をとる傍ら、中東問題専門家として折に触れマスコミに登場するラーナツァ女史の意見には注目していた。イランの核開発疑惑を巡る欧米とイランの交渉が合意に向けて大詰めを迎える中、イラン情勢にも詳しい同

女史は、シーア派の教義「タキヤ」（異教徒との戦いでは、自らの本心を隠すこと、すなわち嘘をつくことも方便として許されるとの考え方）を引き合いに出して、イランは道義的な後ろめたさを感じることなく欧米との間の合意を守らないのみならず、今後とも秘密裡に核開発を進めるであろうと警鐘を鳴らしていたのである。そこで私は彼女を大使館に招き、イラン情勢や中東情勢について興味深い意見交換を行ったが、話の外縁でスウェーデン、日本、オマーンの三極で女性の地位や社会進出について議論する機会を設けてみてはどうだろうと打診した。

その背景にある私の思惑は次のようなものである。スウェーデンは世界で最も男女平等・機会均等の進んだ国の一つであるが、年金・医療を始めとする幅広い分野で充実した社会保障の確立されていることがこのことを可能にしている。その結果、現下の社会民主党首班の内閣では閣僚の半数、現立法会期の国会議員の48%を女性が占め、20歳から64歳までの女性労働人口に占める専業主婦の割合はわずか2%である。女性も病気療養など特別の事情がない限り一般に定年まで働くことが社会の前提になっているのである。これに比べて、日本はどうだろう。依然として家や家族に着目して社会福祉や税制が出来上がっているため、女性は往々にして配偶者の地位の下で手厚い社会保障や税制上の優遇を受け、個人単位の課税システムが徹底しているスウェーデンのように女性の置かれた立場がある意味で厳しくない。他方で、家族単位の安定スキームに乗れない若者は結婚もできず、貧困の境目をさまようような事象も近年生じてきている。更に、駐オマーン日本国大使としての個人的な経験に照らして、世界からは女性の自立や独立が果たされず社会進出が限られているのだろうとアラブ世界に関する「誤ったパーセプション」で見られがちなおマーンの女性代表をここに加えたら、意味のある議論が出来るだろうと考えたのである。



実際、オマーンの首都マスカットで暮らす中流家庭以上の多くの女性たちは実業家や教育者として、更にはサウジアラビアなどとは異なりサービス業において就業しているのである。興味深いことに、オマーン人男性の間にも女性が働くことを許容する文化的土壌があり、啓蒙君主であるカブース国王統治の下でこの傾向は意識的に助長されている。日本との違いを挙げるならば、彼女たちの多くは自宅に家政婦や子守りを置いて仕事に出かけることが出来るという恵まれた環境であろう。

我々がスウェーデンに赴くその日まで、一体全体オマーン側からの出席があるのか、誰が来るのかは主催者を含めて誰にも分からなかった。着いてみてびっくり、何とスルタン・カブース大学でかつてアジア言語学科長を務めていた旧知のマフルキー女史に出会ったのである。今や彼女は副学長として多忙の日々を送っているが、ほんの数日前にビーマニ学長からこのワークショップにオマーン側を代表して参加するようにと言い渡されたとのことであった。いかにもオマーン流である。

さて、果たしてワークショップでの議論は上手くかみ合ったのか。様々な角度からの議論を通じて、以下の諸点が浮かび上がってきたのは興味深かった。

まず、三カ国における政治的、社会的、文化的背景は異なるものの、それぞれの社会における女性の地位を巡っては多くの類似点が存在するという点である。女性のライフ・サイクルという視点からは、出産・育児、教育、結婚とそこから生じる配偶者や家族との関係、離婚、定年及び死別といった人生における決定的な瞬間を数多くの女性が経験するという意味でも類似点がある。そこでは、女性に特有な状況から生まれる類似性に留まらず、家族内で



の家族との関わりや意思決定への関与の仕方といった社会的な側面でも大きな相違は見られない。また、女性が家庭や社会における「エンジンの役割」を果たしていることが、程度の差はあるにせよ、いずれの社会においても認められる。

違いが現れるのは、社会における女性の機会均等、男女平等を達成していくうえで、政府や国家機関がより高いレベルに到達するために規範を制定し、これを実行に移していく意思があるかということであり、社会の構成員がその規範意識の重要性を認めて公的機関の政策的努力を助長するかどうかという社会的風土によるところが大きい。特に大切なのは、「女性の権利」として国際的に認められたスタンダードに到達すべく不断の努力が行われているかであり、そこでは日本、スウェーデン、オマーンの社会の間で濃淡が見られる。その意味で、社会における「エンジンの役割」を担うべき女性の立場が「性の差異」を超えてより普遍的に平等な立場へと導かれるために為すべきことは、これからも三カ国が一緒に考えていく余地のある課題である。三カ国の議論を通じて、より系統だった女性のあるべき姿を描き出すことができれば、その国際的な意義もより大き

なものとなる。

専業主婦を巡っても興味深い議論があった。スウェーデンの参加者にとっては、日本でいまだ主流の専業主婦のステータスは興味深い考察対象である。そこでは、ある社会における平等達成のために障害と映る概念が、他の社会では女性の力の根源になっているようであり興味深いとの指摘が行われた。少なくとも、少子化などの影響で人材に限られるようになればなる程、いずれの社会においても女性が様々な分野の職業に従事する必要性は増すとの点では共通認識があった。

ワークショップを主催したルンド大学側のホスピタリティは充実したものであった。ルンド訪問後、我々一行はストックホルムに招かれ、ストックホルム大学中東言語文化学部長マーティン・セーフストローム教授をはじめとする研究者と有意義な意見交換の場を持つことが出来た。また、女性の社会的地位向上に取り組むスウェーデン政府の委員会メンバーであり、人材開発会社Novare社CEOを務めるフレデリック・ヒレルソン氏から女性の社会進出を促進する手立てに関連して、スウェーデンの現状につき説明を受け、日本への貴重なアドバイスを聴取する機会

を得た。同氏は日本政府が主催する「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム(WAW! 2015)」に出席して、安倍総理とも親しく意見交換する機会を有した人物である。

今回のワークショップを通じて、様々な興味深いネットワーキングを築くことが出来た。参加者の間では、せっかくここまで来たのだから、この三極の枠組みを維持し、今後、持ち回りでテーマを変えてこのワークショップを行っていくことの合意が出来上がった。東京大学中東地域研究センターでも是非その期待にこたえることが出来ればよいものだと願っている。そのような機会を通じて、急速に進化する日本女性の置かれた地位と役割について、参加者に最新の現状認識を深めてもらうことも可能になるからである。



4. カタル・ドーハ研修報告： ジェンダーと女性性／男性性の観点からの考察

東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻
修士課程
保井啓志

2016年3月4日から同8日にかけて東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム多文化共生・統合人間学プログラム中東・アフリカユニットによる助成を受け、5日間のカタル研修として中東カタルのドーハを訪れることができた。また、本プログラムは地域文化研究専攻での「地中海・イスラム地域文化研究演習Ⅱ」

の授業と連関しており、その学びの集大成としてカタルへの渡航が実現した。本報告では、そのカタル研修の成果として、カタルでの研修の報告と本研修の主眼であるジェンダーに関する簡単な考察を述べる。

5日にハマド国際空港に到着し、そこから午後にはイスラーム美術館への見学を行った。イスラーム美術館は、東はイランやアフガニスタン、西はマグレブ地方やイベリア半島に至るまでの様々な歴史的遺産を展示している。カタルは建国から40年ほどしか経っていない新興の国であり、驚くことにカタルから出土した出土品

はほとんどと言っていいほど見当たらなかった。にもかかわらずカタルがこうして美術館を作り、イスラーム美術を取り扱っているのは、イスラームを国として重視したいカタルの姿勢の表れとしても捉えることができる。

6日にはハーリドモスクへの見学と、今回の研修の主題であるカタル大学への訪問を行った。カタル大学の訪問では、「湾岸地域における国家形成」という主題のゼミ形式での大学生向けの授業に参加したが、湾岸諸国をはじめとして様々な背景を持つ学生が教授とほとんど対等に意見を交換しあっていた。議題は1970年代に湾岸地域に多くの国家が形成していった初期条件に関するもので、石油の存在や宗教、部族、経済力、国際関係と多様な側面

からどの要素が国家形成と深く関連しているのかを探っていた。

7日にはステートグランドモスクとスークワーキフの視察を行った。1万人以上を収容できるステートグランドモスクはドーハで最大のモスクであり、非ムスリムでも立ち入ることが可能ではあるものの、平日に訪れたこともあり、ほとんど観光客はおろか礼拝する人々も見えなかった。対照的に、スークワーキフには多くの観光客をはじめとした人々がごった返しており、観光資源としての二つの両者の扱いの差を感じる事ができた。

女性性／男性性の表象とジェンダー

わずか5日間の研修ではあったものの、カタルにおける女性性／男性性の表象とジェンダーに関して示唆の富む出来事にいくつか触れることができた。6日にハーリドモスクを訪れた時、館内でイスラームの教えを説明した展示を見る機会があった。その展示はアラビア語と英語で表記しており、イスラームの信仰や実践に直接的に関わるものからそうでないものに至るまで説明がされていたが、その中に「イスラームにおける女性」と「子供の権利」の一角がわざわざ設けられていた。このコラムでイスラームにおける女性と子供がどのように説明されているか、そしてその説明のされ方・論理の使われ方も重要ではあるが、この報告ではそもそもどうして女性と子供が言及されているのに対し、イスラームにおける男性／大人には言及されないのかということに注目していきたい。

これを考えるのにニコライ・トゥルベツコイの「印づけられたもの／印づけられないもの」の観点から考察してみたい。ある言葉の具体的な像を想像する時に、非対称な形で言及のされ方がなされることがしばしばある。例えば、日本語の「作家／女流作家」という二つの言葉を考える時、男性性及び女性性は言及のされ方に非対称性がある。女性性は「女流」という言葉によってわざわざ言及され印づけられ（なければ想定されず）、男性性はその限りではなく、自然に想定されるものとして当然視されている。今回の件に即して考察すれば、女性性や子供であることは



カタル大学にて (撮影者：筆者)

特別な言及が必要な「印づけられたもの」として解釈が可能であろう。この時男性／大人という二つのものはその存在を当然視され、自然化されているために特別な言及を必要としない、つまり男性／大人の人権は当然守られていることを前提とし、その構造を温存する。こうした非対称性は社会のあり方、その社会での表象のされ方に影響を受けており、どの場所・どの地域でも同じであるとは言えないが、今回のドーハ・カタルの事例でもこの議論の例外ではないかもしれない。

さらに、「ここで女性／子供に言及することは、どのような意図があるのか」ということについても考えてみたい。まず、この展示でイスラームのどの側面を紹介するかという問題にはきわめて現代的な問題関心が密接に影響していることは見逃せない。実のところ、「イスラームにおける女性の地位」というコラムは、「ムスリムにとってのイエス」「テロリズムに対するイスラームの立場」「イスラームにおける人権と正義」などのコラムと並列の形で記載されており、非常に示唆的である。これらのコラムの章立ては、イスラームと人権・正義は相容れないということや、イスラームは女性に抑圧的である、と言いたいずれもイスラーム社会の外での（主に英米をはじめとした西洋キリスト教社会の）主流のイメージを払拭することが意図されていると考えられるだろう。こうしてイスラームの教義の非イスラーム（とされている）概念との親和性を強調することに、女性と子供という二つのカテゴリーは利用されており、さらにこの時テロリストをイスラームと相容れない概念として退けつつ、女性と子供を称揚する、という両者の対照的な取り扱いには、その政治性が最も

顕著に表れている。

ジェンダーに関連のある（と思われる）出来事には6日のハーリドモスクの事例の他にも遭遇した。7日にステートグランドモスクを訪れたが、その収容人数は男女で圧倒的に最大収容可能人数が違った。男性が1万人収容可能なのに対し、女性はわずか1000人ほどであった。この最大収容可能人数をもってこれをただちに絶対的平等の観点から性差別的であると判断するのは早計である、なぜなら最大収容可能人数がそもそもどこまで（差別的な）影響を持ちうるかに関しては未知数であるからだ。しかし、20世紀に建てられたこのモスクが建設・設計されるにあたり、ジェンダーという要因が作用していることは言えるだろう。

他には6日にカタル大学を訪問し、授業に参加した際、教室に大小二つの机があったのだが、筆者は特に考えることなく大きな机の方に着席した。その後徐々にカタル大学の学生が教室に入り着席する際、申し合わせたわけでもなく人数の多い女性（と思われる人）は大きな机に、人数の少ない男性（と思われる人）は小さい机に、ジェンダーによって分かれて着席したため、筆者はその分離という暗黙の規定（ないしは力）を一時的に侵犯し、越境してしまった形になったのだ。これは、日本の大学ではあまり意識することのないジェンダーの作用を筆者自身が意識させられた瞬間であった。

このように、わずか5日間の研修ではあったが、ジェンダーや女性性／男性性に関する示唆的な出来事に触れることができ、今後の研究にとって実りの多い研修になった。



ステートグランドモスクにて (撮影者：筆者)

5. “When Dissonance Becomes Unexpected Harmony: How Artists Are Re-Imagining Saudi Arabia’s Culture and Society”

早稲田大学国際教養学部
准教授

Matthew Gray

On May 16 this year, Associate Professor Sean Foley, from Middle Tennessee State University (MTSU) in the United States, made a presentation at Tokyo University for the course “Mediterranean and Islam Area Studies; Seminar I”, run by Associate Professor Namie Tsujigami.

A/Prof. Foley’s presentation explored how a new generation of Saudi artists treats culture as a vehicle to promote a broader discussion of the problems confronting their society in the twenty-first century. He argued that these artists – many of whom have no formal training in the arts – are not part of the Kingdom’s traditional intellectual elite, nor indeed are they the types of cultural producers most often examined by scholars and observers of the Kingdom. Rather, they are culturally-attuned, dynamic and ambitious young artists who seek both personal expression and a voice for the feelings and experiences of their generation, through the language of culture and using means and daring which the broader Saudi population often cannot easily express.

A/Prof. Foley noted that artists have been most successful at channelling these feelings when their work provides fresh ways of looking at controversial issues, such as women’s driving and religious extremism. In so doing, he explored how these artists have utilized social media and new technology to

promote their ideas.

A/Prof. Foley began his presentation by talking about the very ambitious, dynamic, humorous and – perhaps not surprisingly – controversial video “No Woman, No Drive”, the title a play on the famous Bob Marley song “No Woman, No Cry”. The video, released on October 26, 2013 by the Saudi production company C3, was a satirical criticism of the ban on women driving in the Kingdom. By releasing it online, it both gained immediate notice and was spread easily, and yet it also gained traditional media attention too, coming at the time of a protest by Saudi women over the driving ban. Foley showed how the video was at once a unique piece of work, transmitted by new online means, at yet also a continuation of a long dynamic of social criticism and agency by ordinary Saudis. This socio-political consciousness, indeed, is something typically missed in traditional scholarly assessments of Saudi Arabia, given the focus on more macro-level, and often state-centric, theories of Saudi state-society relations.

A/Prof. Foley went on to explore a range of artists and commentators in the presentation, including Abdunnasser Gharem, Ahmed Mater, Malik Nejer, Amy Roko, and Omar Hussein. In their own ways, these cultural producers are entrepreneurial; often their goals include to make money as well as to provide social commentary. But the latter is what is most important, A/Prof. Foley argued: these young Saudis disprove a number of myths about

young Saudis, including the assumption that nearly all are “bought off” by state rent distributions; that most are driven by mercantile or prestige concerns in their career rather than also seeking meaning and influence; and perhaps most important, that although the Saudi state is very durable, Saudi society is dynamic, and its culture is able to change, adapt, and manoeuvre in order to give themselves a voice. More than this, it is often overlooked or denied by observers that Saudi society is complex. Rentier theory, among other explanations, is often very simplistic, and yet Saudi culture is anything *but* simplistic. In fact, a key feature of it, shared to some extent across the Arab world, is an ability to hold a range of views and positions, some of which sometimes seem contradictory. Saudis, including youth, can simultaneously hold views that are both conservative and seeking change; they can harness technology without being defined by it; and they can critique the system in which they live, work, and are engaged without wanting to dismantle or destroy it.

In the latter part of the presentation, A/Prof. Foley showed several videos to illustrate the key points he had made. Beyond “No Woman, No Drive” – which obviously got many laughs, while also illustrating Foley’s arguments cogently – the videos critiqued extremist perspectives on martyrdom and terrorism, and the sources of conflict



in the Middle East. They highlighted the ability of young Saudis to articulate social and political views that were at once both clear and yet sophisticated, articulate and yet not confrontational towards the Saudi state or political system. Their approach has allowed them to keep making such videos; notably, the state has not intervened

to silence or influence them – an important point discussed at length in the question-and-answer session that followed the presentation.

In making the arguments that he did, and using a very under-utilized methodology and approach, A/Prof. Foley reminded the audience of a new

and contrasting way in which to view the Kingdom; one that challenges many of the assumptions often made about Saudi Arabia and its people, and which goes beyond the usual scholarly works that focus on simple questions of the prospects for stability or instability in the country.

6. 講演会・ワークショップ報告記

(1) 特別講演会

「エジプトとイランの歴史と社会」

日 時：2016年1月20日(水)

16:00-18:30

場 所：東京大学駒場キャンパス 18号館
コラボレーションルーム3

講演者：竹村和朗(中東研究者)

小澤一郎(上智大学)

1月20日、上智大学共同研究員の小澤一郎氏と、東京大学大学院総合文化研究科出身で中東地域研究者である竹村和朗氏を招き、「エジプトとイランの歴史と社会」と題する講演会を開催した。

最初に小澤氏が、「近代イランと武器移転：タテ(時間軸)とヨコ(地域)の視角拡張の試み」と題する歴史学的な研究報告を行った。小澤氏は、まず火器史研究にいわゆる軍事オタク、趣味の延長という偏見を超えた意義があることを指摘し、火器のもたらした、世界史的影響力の大きさ、地域間比較・連関の可能性や、火器史が、政治史、外交史とも密接に関連している、人類の歴史を考える上で重要な課題であると主張した。氏は、火器の発展史を概観したうえで、特に「公式」「非公式」の武器移転という研究上の切り口を説明した。「公式」の武器移転とは、地域の支配権力の主導ないし、公認のもとに行われる移転をさし、「非公式」のそれとは、支配権力が関知しない、または黙許により行われる移転をさすという。こうした視点を利用して、近代イランの武器移転の歴史を19世紀初頭から第

一次世界大戦まで概観し、とくに1870年代以降に「非公式」武器移転が拡大し、それが地方勢力の武装化をもたらし、20世紀初頭の立憲革命における武装闘争に大きな影響を及ぼしたことを指摘した。こうした話をうけて、クラウドの議論を用いて、「タテ」の視角拡張として、長期的視点から、イランの武器さらに、「ヨコ」の視角拡張として、比較と連関からもイランの武器移転史を考察した(特に日本との比較)。

質疑においては、クラウドの議論をもとにして長期的視点における考察の妥当性や、武器のなかにおける火器の重要性、古代からの武器革新との関連性や、比較を実際に行う際のさまざまな論点などが話し合われた。

続いて、竹村氏により、「現代エジプトの結婚式：プハイラ県バドル郡におけるファラハの参加と開催の観察から」という人類学調査に基づく研究報告が行われた。氏の報告は、現代エジプトの結婚式の概念と実践の両面を検討するもので、特にファラハと呼ばれる祝宴の役割と位置づけに焦点が当てられた。報告では、まず結婚の



法的な手続き、婚姻契約に関する特徴が概観され、祝宴にあたるファラハが、民俗誌などでどのように語られてきたのか、レインに始まる描写が紹介された。その上で、竹村氏自身が2009年から2012年までエジプトのバドル郡にて行った現地調査の成果を、画像・映像を交えて説明した。ここでは、ファラハの様子が講演者自らの体験・目撃をもとに構築され、文献資料からはわかりにくい一連の結婚儀礼のありようと、そこに見られるさまざまな人間(新郎・新婦、主催者、親族、参加者)の力学があざやかに提示された。主催者は、参加者に盛大なもてなしをすることで、好印象を与えることが重要になっているという。また以前は、結婚において処女証明が重要であったのに、現在のファラハ・結婚式の一連の行事では、その儀礼は比較的秘密にされるようになり、一方で、新郎新婦の相愛が、参加者に積極的に提示されるようになってきているという。このような「見せる」・「見る」という眼差しの交錯、愛の形の提示は、恋愛観、ジェンダー観の変化とあわせて、今後より議論を深める必要があると、講演者は締めくくった。

質疑においては、他地域との比較や、食事提供の意義、都市との比較、前代との比

較（老人の語りのなかに見られるファラハなど）のほか、ファラハの費用の問題など、議論は多岐に亘った。

いずれの講演も力強く内容も充実しており、歴史学研究と人類学研究の最新の成果が示された。非常に有意義な講演会であった。

(2) 特別講演会

「中央アジアとトルコの歴史と文化」

日 時：2016年5月26日（木）

17:00-19:00

場 所：東京大学駒場キャンパス 10号館
301会議室

講演者：山下真吾（高崎経済大学）
青木健（東京大学）

5月26日、高崎経済大学兼任講師の山下真吾氏と、東京大学学術研究員である青木健氏を招き、「中央アジアとトルコの歴史と文化」と題する講演会を開催した。

最初に山下氏が、「古典期オスマン朝政治思想についての一考察ーイドリース・ビトリースーを例として」という、政治思想にかんする歴史学的な研究報告を行った。山下氏は、まず、ギリシア哲学的な人間行動の主体性論と、イスラーム神学における神の定理という二つの考えの折衷について、位相論と獲得論という二つの思想を紹介し、オスマン治下では「位相論」が主流となったことを指摘した。その上で、15世紀古典オスマン朝政治思想の類型論的比較として、アフメディーの『イスケンデル・ナーメ』とイドリース・ビトリースーの『八天国』を取り上げ、作品と著者の経歴の概要、また作品の位置づけを説明し、政治思想を考察した。山下氏によれば、アフメディーの思想は、神の意思を重視し、因果応報論に立ちつつも、説明困難



な事象を説明するときには、神の意思を疑問視することもあったという。また、宗教的観点からジハードを重視している。他方、ビトリースーは、社会の諸要素のバランスを重視し、広く政治的立場から異教徒との共存を、現実的に論じているという。いわゆるイラン的王権論・鏡文学の影響が見出せるのである。このように初期オスマン朝政治思想には多様な議論が観察されるため、政治思想と神学論研究を組み合わせた緻密な考察が求められるという。質疑においては、東アジア的な徳治主義との関係性や、ビトリースーの経歴を問うものや、初期オスマン史の別の有名な史料である『アーシュクパシャザーデ史』を含めた史料との関連性のほか、シーア派・サファヴィー朝との関係など、議論は多岐に亘った。

続いて、青木氏により、「中央アジアのゾロアスター教遺跡」という現地調査に基づく研究報告が行われた。氏によればこれまでのゾロアスター教研究は、大きく分けて二つに分けられるという。一つは、イラン南部ファールス地方をモデルとした文献学的な研究であり、主として欧米や日本などにおいて盛んである。他方は、中央アジア・ソグディアナ地域を対象とした考古学調査に基づく研究であり、旧ソ連圏において発展してきたという。この二つの研究は、地域・手法ともに異なることから、それぞれが生み出すゾロアスター研究の実績も大きく異なり、これを統合する必要を痛感して、文献学的な研究の出身である青木氏が中央アジア現地調査を敢行することを決したとのことである。

青木氏は実際に、2014年からタジキスタンにおける現地調査を開始し、昨年は、現地ソグディアナの王が、ムスリム・アラブ軍に抵抗して最後まで立てこもったというムグ山を踏破し調査を行った。また、現地博物館などにも訪問し、収蔵品を分析したところ、同じゾロアスター教でも、ファールス地方とソグディアナでは、拜火壇に大きな差があり、前者はドームがかかった比較的大きな建築物であるのに対して、後者は、持ち運び可能な灯籠のような形態が主流であった可能性が高いことを指摘した。

質疑においては、現地の研究動向・遺跡



の保全や、現在の国境を越えたソグディアナの広がりから、隣国も含めた研究の可能性など、文献学と現地調査の接合に関して興味深い議論が続いた。

両方の講演とも、登壇者の最新の成果が盛り込まれており、有意義な講演会であった。

(3) 特別講演会

“Honour Crimes and the Demonization of the Palestinian Woman”

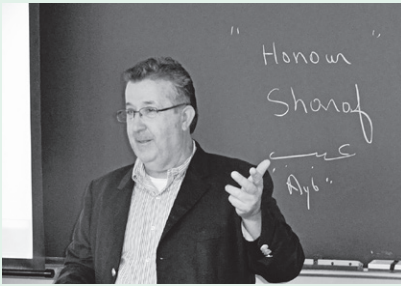
日 時：2016年6月13日（月）

14:55-16:40

場 所：東京大学駒場8号館112教室

講演者：アリー・クレイボ
(アルクドゥス大学)

東京大学中東地域研究センターは、来日中のアリー・クレイボ氏（アルクドゥス大学教授）を招き、“Honour Crimes and the Demonization of the Palestinian Woman”と題する講演会を開催した。パレスティナの社会史や神秘主義を研究するクレイボ氏は、いわゆる前近代的な悪習として非難されている「名誉殺人」に関する講演を行った。氏はまず、パレスティナ社会を、都市民、農民、遊牧民（ベドウィン）の三つの社会集団に分け、農民（都市外の集落に住む人々）に焦点を当てて、名誉 sharaf とは何か、どのような現象で「名誉殺人」が成立するのか、その論理を分析した。都市部の家族構成は、核家族が多いのに対して、農村部は拡大家族が一般的であるという。最近、比較的近代的な住宅が農村部でも建設されているが、それ以前は、横穴式を改良したような住宅に住んでおり、そこではいわゆるプライバシーは存在せず、夫婦間の性交渉についても、家族内で秘密はないという状況であった。つ



まり、家族内では、性に関する「名誉」は存在しない。したがって、もし家族内において姦通があったとしても、それが家族成員間の場合（たとえば、義理の父と息子の嫁など、とくに嫁が夫の従姉妹である場合など）は、名誉殺人の対象にならず、公然の秘密として処理されるという。それが、親族外の第三者が関与すると、公然の秘密として処理されず、「名誉殺人」が行われることになるのである。その際、女性こそが、無垢な男性を誘惑したとして、女性が制裁の対象になる。ここに、男性の立場を正当化し、女性に一方向的に原因を見出す不条理な論理が働くのである。このように、家族内の場合、公然の秘密として処理される「偽善」性と、女性のみ責任を転嫁する複合的な問題が指摘された。また、名誉 sharaf とは、金銭的な問題はほとんど重視せず、女性の性に圧倒的に適応される概念であるという。

クレイボ氏によれば、名誉殺人が抑制されない原因の一つは、これに関する刑の軽さであるという。したがって、社会や慣習を変えるのは困難だとしても、法律を改正することによって改善を図ることが望まれることを述べた。また、パレスティナにおいて問題を複雑にしているのは、占領状態であるという。名誉殺人のほか、婚姻前の女性が性的な暴行を受けた際に、その暴行を行った男性と婚姻することが要請される事象は、民事にかかわることであるため、イスラエルの治安・警察当局は積極的にかかわらず、また、パレスティナ人側も、イスラエルの官憲に犯罪者として、社会の一員を引き渡すことを好ましく思わないため、いわゆる伝統が温存されるという。

質疑においては、一夫多妻の問題、異なる集団間の婚姻（都市民／ベドウィン／農民）のあり方、家族内の女性の結束の有無などについて、積極的な議論が行われた。

(4) 公開講演会

「中東・北アフリカの少数派再考」

日 時：2016年7月8日（木）
16:30-18:00

場 所：福山市立大学6階601 演習室

登壇者：菊池達也（東京大学大学院人文社会科学系研究科 准教授）

阿部尚史（東京大学中東地域研究センター 特任助教）

桑原尚子（福山市立大学都市経営学部 准教授）

高橋英海（東京大学大学院総合文化研究科 教授）

共 催：科学研究費基盤B「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」（研究代表者：高橋英海）

中東地域研究センターは、科学研究費基盤(B)「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」（研究代表者：高橋英海）との共催および福山市立大学都市経営学部の桑原尚子氏との共催で、「中東・北アフリカの少数派再考」と題する研究会を開催した。以下、その報告である。

菊池達也氏は、「アラウィー派創始者ハスィービーの思想とその背景」と題するにおいて、アラウィー派／ヌサイル派の事実上の創始者とみなされるハスィービーの生涯と社会的環境を紹介し、彼の著書とされる書簡集「ラーストバーシーヤ」の分析を行った。ハスィービーは、9世紀後半に生まれ、10世紀にイラクとシリアで活躍した思想家である。「ラーストバーシーヤ」は、プワイフ朝君主サイフッダウラに献呈された作品とされるが、正統12イマーム派とは大きく異なる思想・教義が記されていることから、疑問が残り、テキスト自体は、アラウィー教徒に向けて書かれたものであることがうかがえるという。本書の刊行状況と、研究の現状を概観し、内容としては、秘教的で、いわゆるグラート思想の延長線上にあることあり、クルアーン解釈からイマームを神格化しているという。ただし、クルアーンを典拠としていることから、自己の思想を、シーア派イスラームの枠内の思想潮流と認識していたことが明らかであるという。

質疑においては、初期アラウィー派思想とキリスト教からの影響（これはないという）や、「正統的」シーア派との関係、当時のスンナ派の異端的存在についてなど、様々な見地から議論が行われた。

桑原尚子氏の報告「差異をめぐる法制度設計：中東を事例に」は、非自由主義の典型とみなされる「ミット制」を、比較法学的見地から考察するものである。これまでの比較法研究がイスラームを考察する際には、家族法が取り上げられることが中心であったことを踏まえて、憲法に注目し、その運用実態を分析しようとする野心的な試みである。

近代立憲主義は、いわば「無色透明」な個人を基礎とするが、中東にはそれは当てはまらず、個人のアイデンティティが宗教とは切り離せない。比較法的な観点からみると、実はこうした中東の事例は全く例を見ない、というたぐいのものでなく、アメリカのアーミッシュの事例やカナダの少数派の事例でも、共同体と憲法における個人の自由が争われる事案が存在するという。また、インドにおける身分法と憲法の両立の問題などはこれまでも取り組まれているという。こうした比較法学的観点から、中東のミット制を研究する意義を論じた。

質疑においては、世俗主義とのかかわり、19世紀のオスマン憲法の位置づけなどが議論された。

阿部尚史「ムスリム社会における多宗派共存の内実：近世・近代イランの事例から」は、中東における「少数派」の重要な事例としてアルメニア教徒の存在を指摘し、これまで、オスマン朝下のアルメニア教徒が悲劇的結末を迎えたことと対比して、イランのアルメニア教徒がさほど大きな迫害をうけずに、現在まで存続したことを述べた。そのうえで、これまでのイランのアルメニア教徒研究が、主としてサファヴィー朝のアップース1世治下のアルメニア教徒がユーラシアに広く商業網を築き、活躍したことを主たる関心とする一方で、イラン西部、アゼルバイジャン地方に古くから存続したアルメニア教徒について研究が少ないことから、多宗派共存という観点から、こうしたアルメニア教徒を研究する意義を指摘した。阿部氏は、特権の継続性に

注目し、王朝や君主の交代との関係を論じた。また19世紀初頭のイラン・ロシア戦争を機に、新たな特権が創造されたことにも言及し、アルメニア教徒が様々な手段を見逃さずに、少数派として生存を図っていた事実を明らかにした。

高橋英海「中東地域の少数派の移住とコミュニティの再建：キリスト教徒の事例から」は、シリア語キリスト教会（ネストリウス派とシリア正教会）の「移動」に注目し、過去と現在の事象をつなげる試みで

ある。ネストリウス派は、アッパース朝初期にもっとも拡大し、中国まで活動を広げたことを明らかにした。こうした活発な活動は、教会の生き残りのために宣教を積極的に行った結果であり、その痕跡として、聖ゲオルギウス殉教伝が中国語に訳され、伝存したことが明らかにされた。

他方、シリア正教会も移動し、移動先で商業などによる成功によって、その都度共同体を再建していたという。この時に重要な役割を果たしたのが、「聖遺物」であった。こうした過去の両教会と信徒の移動を

踏まえて、現在のイラク、シリアで迫害されるキリスト教徒の移動と比較し、共通性と相違を論じた。

(文責：阿部尚史)



7. 研究案内

(1) インド・ビハール州パトナーの ホダーバフシュ東洋図書館調査 (2016年)

東京大学大学院総合文化研究科
学術研究員
青木 健

2016年2～3月に、筆者はインド・ビハール州の州都パトナーにあるホダーバフシュ東洋図書館(Khuda Bakhsh Oriental Library)にて、近世ペルシア語写本の調査に当たった。以下はその際の記録と、ホダーバフシュ図書館の紹介である。因みに、図書館名Khuda Bakhshの原語はペルシア語で、現代イランでは「ホダーバフシュ」と発音する。これに対し、インドの現地語では往々にしてこの綴りを「フダーバクシュ」と読む。日本人研究者の中でも、イラン研究者とインド研究者の間でカタカナ表記が一定していないが、本稿では「ホダーバフシュ」を採用した。

* * *

パトナーは、現在でこそインドの最貧州ビハールの州都という状況に甘んじているものの、古代にあってはインドの覇権国家の首都パータリプトラ(華子城)として盛名を誇っていた歴史都市である。マガダ朝(紀元前5世紀)がパトナーの南方107キロの盆地にあるラージャグリハ(王舎城)から遷都して以来、ナンダ朝(紀元前4世

紀)、マウルヤ朝(前318～前180年)、グプタ朝(320～550年)、パーラ朝(750～1162年)と連なる歴代王朝はいずれもこのガンジス川河畔の水陸通運の要衝パータリプトラに首都を構え、ヒンドゥスターン平原を支配した。インド・マムルーク朝が首都をデリーに定めて以降、インド・イスラーム政権の政治的中心はムガル帝国に至るまでデリーに固定されるものの、紀元前5世紀から12世紀まで1700年以上継続的に栄えていた点で、パータリプトラはインド屈指の古都と呼べようである。

但し、パータリプトラは水運の要衝に位置しているというメリットの裏返しとして、頻繁にガンジス川の洪水に見舞われるというデメリットも有している。歴史書の上で参照する史実に比べると、現地には驚くほど何も残っていない。パータリプトラの宮殿遺跡に至っては、未だに水没したままである。筆者は滞在中にパトナー博物館を訪ねてみたものの(ついでながら、インド人料金5ルピー、外国人料金500ルピーと入場料に100倍の格差があった)、古えのパータリプトラに関する出土品は存外に少ない印象を受けた。辛うじて、周辺に仏教遺跡が点在しているのみである。例えば、釈迦が悟りを開いたブッダガヤー(仏陀伽邪)が南方127キロ、仏教教団発祥の地ヴァイシャリー(毘舍離)が北東55キロに位置している。

このパータリプトラが一時的に息を吹き返すのは、16世紀にスール朝(1539-55年)の首都に選ばれてからのこと。ガンジス川の水運を利用する船舶と、ベンガル湾から遡航する船舶の合流地点がパータリプトラに当たる為、交易の中心地として復興を遂げたのだと説明されている。因みに、筆者はベンガル湾から遡航する船がパトナーまで入港できるとの話を若干疑っていたのだが、全長6キロに亘るマハートマー・ガンディー橋を渡った際のガンジス川の余りの広大さと、水面をジャンプするイルカの大群を見て、この疑問を捨て去った。

スール朝以降に再生したパータリプトラに流入してくるイスラーム教徒は、旧パータリプトラ市街の東方一帯に住みつき、この地区をアズィーマーバードと称した。この為、現在でもパトナーの街は、ヒンドゥー教徒が多い旧パータリプトラ地区と、イスラーム教徒が多い新アズィーマーバード地区に大きく二分されており、それぞれの雰囲気も随分と違う。筆者の個人的な経験では、イスラーム教徒の方は「パトナー」の名称を使わず、この街全体を「アズィーマーバード」と称しているようであった。

* * *

インド亜大陸は、13世紀以降のイスラーム政権が近世ペルシア語を公用語に指定しただけあって、イラン本国に匹敵するほどの量の近世ペルシア語写本を蔵している。但し、オスマン帝国のように旧首都イスタンブールに殆どの資料が収蔵され

ているという訳にはいかない。セポイの乱（1857年）でデリーが廃墟となった影響で、旧ムガル帝国時代の写本はインド各地に流出したのである。現在では、

- ・ウッタル・プラデーシュ州ランブルのランブル写本図書館
- ・アーンドラ・プラデーシュ州ハイデラバードのサーラールジャング博物館図書館
- ・ラージャスターン州トーンクのトーンク写本図書館
- ・ビハール州パトナーのホダーバフシユ東洋図書館

の4つが、デリーから流出した写本を収蔵する図書館の白眉とされる。この中でホダーバフシユ東洋図書館は、ビハール州出身の法律家マウラヴィー・モハンマド・バフシュ（1876年没）、ハーン・バハードゥル・ホダー・バフシュ（1908年没）父子が二代に亘って蒐集した写本約4,000点を基礎にして、1891年に設立された。その規模は100年以上を経て拡大を続け、現在では21,000点にも及び貴重な写本を所蔵するイラン研究者・インド研究者共に必見の写本図書館に成長している。2016年段階では、ペルシア語写本カタログ14巻、アラビア語写本カタログ29巻の合計43巻の写本カタログが出版され、オンラインでの検索も可能である（<http://kblibrary.bih.nic.in/>）。また、一般論として、イスラム系写本のデジタル化はイスタンブールで最高度に進み、そこから東へ行くに従ってデジタル化の達成度が急降下する。しかし、ホダーバフシユ図書館では写本のデジタル化が予想以上に進捗しており、インターネット上でPDFを閲覧できる。

* * *

筆者が、アショーク・ラージパース通り沿いのパトナー大学にほど近い文教地区にあるホダーバフシユ図書館を訪問した



ホダーバフシユ図書館の全景



ヒンディー語、ウルドゥー語、英語の三語併用で書かれたホダーバフシユ図書館の看板

ところ、喧噪に満ちた市街から見れば別天地のような静寂に満ちた敷地内に、二階建ての瀟洒な図書館が聳えていた。（残念ながら館内は写真撮影禁止だったので、門外からの写真を参考までに掲載して頂くことにする。）入り口で荷物を預けて身分証明書（普通はパスポート）を提示し、入館記録にサインすると、後は自由に閲覧室に立ち入れる。写本のオーダーは、館内備え付けのインターネットまたは写本カタログを通して行われる。有り難いことに、全てのコミュニケーションが英語で可能である。待つこと数分にして、写本の実物が届けられるので、あとは閲覧机の上で納得のいくまで現物をじっくり返し、眼光紙背に達するまで読み耽ることを得る。ただ、注意しなくてはいけない点が幾つかある。第1に、写本のコピーは全体の25パーセントに限られる。コピー自体もCDに焼いてくれる訳ではなく、紙コピーである。第2に、コピー料金は1ページにつき5ドルという高額設定になっている。

もう一つ、この図書館の隠れた利点は、パトナー在住のイスラム教徒の知識人・読書人が集う一種のサロンを形成しているところにある。筆者はパトナー滞在中、アズィーマーバード地区にある聖者廟を訪ねて頻りに現地に足を運んだが、一向に目指す聖者廟を発見し得なかった。しかし、この図書館に来館していたスーフィー・タリーカの老師たちに声をかけてみると、意外なほどスムーズに情報を聞き出すことができ、首尾よく目的を達した。端倪すべからざるムスリム間の口承ネットワークであった。パトナー在住のイスラム教徒たちの多くは印パ分離独立後にパキスタンへ移住したと聞いたが、パトナーのムスリム文化の最後の残り火のようなものが、ホダーバフシユ図書館に灯されているようである。

(2) ラクダに火器を載せる話

上智大学アジア文化研究所
共同研究員
小澤一郎

テヘラン北部、革命前はパフラヴィー王家の離宮であったサアダーバード宮殿博物館群の中に軍事博物館がある。著者が訪れた2010年当時、館内で来館者をまず迎えてくれたのは有史以来のイランの各時代の軍装をまとった等身大の人形であったが、その傍らに、特に来館者の目を引くでもなく、長さ50-60センチほどの小さな大砲がひっそりと置かれていた。

一人一人が持つには重すぎるし、かといって大砲としてはいささか小さいこの大砲、見慣れない人間にとっては何のために存在しているのか見当がつかないであろうが、近世以降のイランやアフガニスタンといった西アジアでも東のほうの歴史を研究している人間は一目でピンと来るはずである。「あ、ラクダに乗せるアレだ」と。

ザンブーラクと呼ばれる大砲をラクダに搭載するようになったのは、イランにおいてはサファヴィー朝（ca.1500-1722）後期のことであるという。火器を駄獣に搭載して機動力を持たせ、自らの軍勢力の中に組み込もうという志向は、騎兵が依然として大きな軍事的プレゼンスを占め、機動性が重視された近世西アジア東部ならではのものであるといえ、ここには火器の受容の過程における「現地化」の好例を見ることができる。そして、このザンブーラクを含めた火器を活用したのが、18世紀前半に登場したナーデル・シャー（位1736-1747）であった。彼の麾下には2000名弱のザンブーラク隊がおり、サファヴィー朝を滅ぼして一時的にイランを征服したアフガン人を撃退する過程においても、火力の優越が勝敗を決したとされる。そして、彼が中央アジアからイラクにいたる広大な領域を征服する際にもこの火力は重要な役割を果たしたのである。

ところが、こうしたザンブーラクの「栄光」も長くは続かなかった。19世紀に入り、ガージャール朝（1798-1925）のもとで西欧式軍隊の創設が試みられると、ザンブーラクは旧式軍隊の象徴となり、「過去の遺物」扱いされることとなったからである。この時期にイランを訪れた西欧人の記録はザン



「ザンブーラク」
Lady Sheil, *Glimpses of Life and Manners in Persia*,
London, 1856, between pp. 184-185.

ブーラクについて概ね否定的な評価をしており、自らの価値基準をもとにザンブーラクを無用の長物と断ずることで一致している。当時の西欧人たちは、近世を通じた技術革新によって比較的軽量で容易に運搬可能な大砲の製造が実現され、その運用技術にも格段の進歩が見られた19世紀当時の西欧の状況は無意識のうちに判断の基礎としていた。ザンブーラクは、機動力こそあるもののその口径は西欧のものと比較にならないほど小さく、またその運用においても、ラクダに搭載していることから明らかなとおりそもそも弾丸を標的に命中させるといふことに重きを置いていなかったから、こんな火器が実際の戦闘において何らかの役割を果たせると西欧人たちが思わなかったとしても無理からぬところであろう。

このような評価を反映してであろうか、事実ガーજール朝の軍隊内でもザンブーラクの存在感は低下していく。19世紀後半になると、ザンブーラク隊はシャーの護衛隊の一部門として兵員も200名足らずとなり、その任務も儀式の際に号砲を発射したり、閱兵に参加したりといった儀礼的なものに限定されてゆく。以下の記述はその様子を如実に示す。

この部隊は非常に見栄えの良い兵士たちの一団で、また見た目通りその素質も優れているように見えた。しかしながら、彼らは単に見せ物としての性格しか有しておらず、今日の戦争のためにはほとんど無用の長物である。……彼らはシャーの行幸に同行し、儀式の際には号砲を放つ。彼らが真紅の馬具をつけ、太鼓を打ち鳴らし管楽器を吹きながらシャーを先導する様は、全く芝居がかった。 (Lady Sheil, *Glimpses of Life and Manners in*

Persia, London, 1856, pp. 185-186.)

ガーજール朝発行の『年鑑』によれば、19世紀末までザンブーラク隊は100名前後の規模で維持されていることが判明するので、おそらくザンブーラク隊は儀式用の部隊としてその存在を細々と維持したと考えられる。この後、イランではラクダを利用する部隊はついに現れないから、近代西欧に端を発する戦争のやり方が導入される中で、ザンブーラクはイランではその役目を終えてしまったかに見える。

しかし、視点を西アジア、否、より広くアフリカやインド、中央アジアも含むユーラシア大陸中央部に広げてみると、事情は全く異なっている。むしろ、19世紀中葉以降の火器技術の進展によってザンブーラクは新たな命を与えられたようにも感じられる。事実、19世紀後半には当時最新鋭のガトリングガンを搭載したラクダ騎兵の事例が報告されている。また、第1次世界大戦期のイギリス軍は中東戦線にて「帝国ラクダ騎兵隊」を組織したが、その兵士たちは後装式ライフル銃を装備していた(ただ、こちらはザンブーラクというよりラクダ騎兵の伝統を汲むといえるかもしれない)。火器技術の進展とその拡散に伴う「現地化」の流れの中で、ザンブーラクは確実にその命脈を保っていたのである。

このうち、後者の事例は先述の火器技術の「現地化」の問題を考える上で非常に興味深いといえるだろう。イギリスを含む西欧列強は、政治・軍事的に進出した先で西欧におけるのとは異なるタイプの戦争(いわゆる「植民地戦争」)を経験したが、それは近代西欧における戦争のやり方が通用しない場であった。そうした状況下、列強の軍隊は自らを「現地化」させること一すなわち、現出人出身者による部隊の編成や、その土地土地にあった戦術の採用一を余儀なくされたのである。第1次世界大戦期のイギリス軍における「ラクダ騎兵隊」の存在は、そうした試みの一つの到達点であったということもできよう。

そして、この試みはある意味では現在まで継続しているともいえる。現に、今日でもインドと南アフリカにはラクダ騎兵隊が存在し、2007年のダルフルでの国連平和維持活動にはインドからラクダ騎兵隊が

派遣された。また、エリトリアで展開していた平和維持部隊でも、ラクダに乗り、機関銃を装備した兵士が哨戒任務に従事していたという。言うまでもないが、ラクダは優れた持久性と機動力を有しており、また気性がおとなしいため馬のように火器の音に驚いて暴れだすこともないという。これほど火器の運用に適した動物はいない。また、車両は燃料を必要とし、暑熱の地では故障を起こす可能性があるが、ラクダであれば適切に食料・水分を与えてやればそのような心配もない。こんな利点を勘案すれば、現在でもラクダ騎兵が運用されていることもあまり突飛とはいえないであろう。

ラクダに火器を載せること、そこには火器の受容と「現地化」をめぐる物語が隠されているのである。

(3) イラン文書調査雑記

東京大学大学院総合文化研究科
中東地域研究センター
特任助教
阿部尚史

筆者が専門とする中東・西アジアだけでなく、先進国以外における史料調査は、常に予想不可能な出来事と遭遇する毎日だと思われる。百年、二百年も昔に作成され、「国家機密」でもなければ、「国益」も、「個人のプライバシー」も、「経済的な利益」にも結び付かないような、古い手書き文書の利用が、なぜかかとも困難であり、公的機関では思わぬところで邪魔されるのか、腹立つことしばしばである。イランでもこれは同様であるが、さらにイランや中東諸国では、良質な史料が文書館や図書館にあるとは限らない、という問題もある。これまで、多くの研究者が、モスク、マドラサ、または個人宅に秘蔵されている史料を利用して研究している。近年は、こうした、公的機関以外に収められている史料の刊行事業も進みつつあるが、たまたま知り合いになった人が、実はいい史料をもっているとか、知り合いのついでで史料を見せてもらう、ということが今でも多い。

イラン北西部アゼルバイジャンの中心都市タブリーズ在住の、筆者の10数年來の知り合いチャイフォルーシャーン氏(ペルシア語に通じている人なら良くわかる

名前である)は、名前の通りの豪商の子孫で、いわばタブリーズの名家出身である。彼の住んでいた家は、現在、文化財・観光庁のタブリーズ支部に買い取られ、保存の対象となっている。筆者は、以前、彼の家を訪問した際に、彼の先祖に関する貴重な帳簿類を見せてもらったことがあった。ただし、その時には筆者の研究関心は、タブリーズ市の別の史料にあったため、興味は持ちつつも、複写の依頼などは行わなかった。

しかし、ここ最近、彼の先祖の史料が気になり、今年(2016年)のはじめ、日本から連絡して、2月下旬から3月上旬にイランに滞在するに際して、閲覧・複写ができないか問い合わせたところ、何とか連絡がつき、あまり長くないイラン滞在中に彼に会いに行くことになった。もちろん、こういう地域ならではの一抹の不安はあった。

筆者がイランに到着して、速やかにチャイフォルーション氏に電話したところ、ちょうど訪問を意図していた時期に、親戚の結婚式のために、一週間ほどテヘランに滞在するという。イランらしい展開だ、とつい思ってしまう(もちろんこうした状況の変化は、イランに限らずどこにでもある)。

結局半ばあきらめて、テヘランで、図書館や博物館を巡って史料調査を行った。ちょうど帰国直前の週末(イランの週末は木・金曜日)、時間が取れそうだったので、改めてチャイフォルーション氏に連絡したところ、その時なら彼も時間が取れそうだ、史料も見せよう、というので、意を決してタブリーズに向かった。

3月初旬のタブリーズは普段なら氷点下の日もあるほど寒い。ただ、今年のイランは暖かだった。到着後速やかにチャイフォルーション氏に連絡をとったが、どうも対応が芳しくない。夕方になりようやく会い、久しぶりの再会を喜んで色々話しているうちに、史料のことになるとどうも反応が微妙で、彼の家ではなく、知り合いの家に連れて行ってくれるという。話を聞くうちに、どうも、今彼の家には、親戚が遊びに来ていることが分かり、そちらの接待もあり、私を家に招いて史料を見せるということができないらしい。それなら早く言ってくれれば、わざわざタブリーズに来なかったのに、とやや気落ちした。

彼の知り合いサラビー氏は、芸術家である一方、史資料の収集が趣味で、家の一

室を展示室にして陳列していた。この芸術家は、ただ所蔵して陳列しているだけでなく、私蔵史料をスキャンまでしており、気前よくそのスキャンされた史料を私に提供してくれた。思わぬ展開である。小一時間滞在し、史料を閲覧し、画像を貰ったりしているうちに、夜になっていたため、その日は宿に帰ることにした。チャイフォルーション氏は、翌日の朝に別の知人宅に連れて行くから、と、妻に電話でせかさされながら、親戚を待たせている家路に急行した。

実は今回タブリーズに来るなら、是非寄ってみたいところがあった。それはテヘランの文化財・観光庁のテヘラン本部に勤務する知人の研究者に教えてもらった。浴場である。イランでは、トルコやシリアとは異なり、いわゆるハンマムと呼ばれる蒸し風呂式の浴場文化が廃れており、現在そういう古典的浴場施設は、喫茶店や食堂に変貌しているか、博物館になっていることが多く、かろうじて残っている浴場は不衛生で滅多に外国人は行かない。ただし、タブリーズにある「ネザーファト浴場」は、違うようだから是非行ってみたい、と言われたので、翌早朝ははっきりしない住所をタクシーの運転手に渡して、聞きまわりながら、なんとか着いた。

浴場は、朝早くからなかなか賑わいで、入湯料も手ごろで、なかなか良い雰囲気であった。また、三助もおり満喫できた。10年前にアレppoを訪問した際に訪れた立派な石造りの浴場に比べれば大分見劣りするものの、イランにもまだこうした浴場文化が残っていることに感銘を受けた。

閑話休題。チャイフォルーション氏は待ち合せた午前10時になっても、現れない。これもまたイランではよくあることで、予想内である。どうやら前日の接待が深夜まで続いたらしく、私が仕方なく電話をしたときにはまだ寝ていたようである。30分ほどして起床したばかりの風体で駆け付けた彼に連れられて、もう一人の知人ニークプール

氏の家にお邪魔した。ニークプール氏の本業は歯科で、お宅も大変立派であった。この人物も趣味が史料収集ということで、また膨大な量の史料を所有していた。残念ながら彼が集めた史料の来歴や出所は不明であるが、私が長らく研究していた一族に関する史料も数多く含まれており、かなり興奮した。なお、ニークプール氏の好事家ぶりは海を越えて米国にも伝わったようで、ハーヴァード大学で中東のジェンダー史を教授するアフサーネ・ナジュマーバーディーも彼の家を訪れて、彼女が主宰するウェブサイト“Women's World in Qajar Iran”のために大量の史料を撮影していったという。

ニークプール氏宅で撮影させてもらった文書には、私が以前文書館で複写し、その後分析した史料を補足するものが多く、非常に参考になった。また新たなテーマの発見もあり、できれば早く形にしたいと考えている。

このように、当初期待していたチャイフォルーション氏の家伝の史料の閲覧や複写はできなかったが、全く思わぬところから別の史料に遭遇する、というのも、現地での史料調査の楽しみである。どうしても必要な史料を利用できないという状況は悲しむべきものであるが、偶然の出会いから新たな研究が生まれる可能性と醍醐味を、改めて体験することになった。今回の私人宅史料調査を企画してくれたチャイフォルーション氏と、私蔵史料を気前よく見せてくれたサラビー氏とニークプール氏には、大変感謝している。

今回の2016年2月22日から3月7日までのイランでの調査は、科学研究費基盤(B)「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開」の研究活動の一環として実現したものである。研究代表者の高松洋一氏と、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の研究協力課には、大変お世話になった。末筆ながらお礼申し上げたい。



ネザーファト浴場



ニークプール氏とチャイフォルーション氏

8. 留学生記録

(1) オマーンでの留学を通じて

東京大学文学部歴史文化学科
学部学生
大矢 純

筆者は2016年の1月末から3月末までオマーンのSultan Qaboos College for Teaching Arabic Language to Non-Native Speakers (以下SQCと略)で正則アラビア語(フスハー)を学んできた。以下、留学の経緯、学校の生活、オマーンで感じた事について述べていただこうと思う。

なお、留学にあたって多くの方々のお世話になったが、いつも未熟な筆者にアラビア語を教えてくださいとお願いしている杉田英明先生、また2015年度冬学期に駒場で授業を行って下さった、オマーン専門の人類学者、大川真由子先生には特に沢山相談をさせていただいたので、このような場所ではあるがお礼を申し上げたい。

留学の経緯

筆者は中学の時から中東を訪れたいと思っていたこと、また現在東洋史専修課程でアラブ・イスラム史を専攻としている関係もあり、かねてから長期休暇中に中東でアラビア語を集中的に学びたいと考えていた。そこでオマーンのSQCを数ある選択肢から選んだのだが、以下、その経緯を述べたい。

まずそもそもSQCを知ったきっかけは、2014年秋に東大本郷キャンパスで行われたスルタンカブースシンポジウムに運営補助員として参加したことである。筆者同様に会場の運営の手伝いをしていたオマーン人の方に、アラビア語を学んでいる旨を述べたところ、当学校を紹介していただいたのだ。

またオマーンという国そのものに魅力を

感じていたこともある。上記シンポジウムまでオマーンという国についてほとんど無知であった筆者は、アラビア半島にありながらその国土は砂漠だけでなく、夏には木々が生い茂る山もあり、綺麗な海とも接しており気候・自然の多様性・その魅力を知りながら強く感じ、実際に訪れてどういった気候・環境・文化が存在するのか自分で見てみたいと感じていた。またオマーンはかなり治安がよくテロなども見られないということで、勉学に励むにもふさわしいと思ったのである。

更に、ちょうどSQCの授業期間と大学の長期休暇がかぶっていたこと、授業料や滞在費など諸費用がオマーン政府の補助を受けていることもあり、他の選択肢と比べてかなり低い料金で参加できること、当学校ではアラビア語の授業だけでなくオマーンの文化や歴史についても学べるなど、学生である筆者にとっては好都合であった。

主に以上のような理由から筆者はSQCで学ぶことを決意したが、実際に申し込みをしてみるとメールの返信が数週間帰ってこないということも茶飯事で、準備には意外と時間がかかってしまったのでもし参加を検討される方がいらっしゃれば、なるべく時間に余裕を持ち早めに申し込むことをお勧めしておきたい。

SQCでの生活について

SQCはオマーン政府の支援を受けて運営されている学校で、主に正則アラビア語の教育を目標としている。その校舎はオマーンの中でもマナハという、車では首都マスカットから約一時間半、古都ニズワからは約三十分の位置にある小さな町にある。そんな田舎にある学校だが、政府がかなり力を注いでいるからなのであろうか、メディアで頻繁に取り扱われているのだろうか、周辺地域の住民だけでなくオマーンの国中の人がSQCの存在を知っていた。なお筆者と一緒に学んでいた学生は合計25人ほど、韓国人が半分ほどであとはヨーロッパ諸国から来ており、日本人は筆者だけであった。授業は基本、朝の八時から午後一時まで休憩を適宜挟みつつ行われ、筆者が参加したときにはクラスは3つあり、中



オマーン現国王、スルタン・カブース国王の肖像画はオマーンのあらゆる場所で見られる、SQC校舎にて(筆者撮影)

級コース、上級コース、更にもう一つはイギリス軍人専用のクラスであった。実はこのSQC、世界各国の公的機関が語学研修の派遣先として検討しているようで、イギリス軍からは中東専門の軍人を育成するために人を派遣しているらしく、またヨーロッパの某大学から教授が見学しに来たり、日本の外務省も専門職員の研修先候補の一つとして検討していて、在オマーン日本大使館から視察に来た職員の方にお会いしたりした。どうやら中東諸国での治安悪化もありオマーンが新たなアラビア語学習の場所として注目されているようである。話がそれてしまったが、クラスの話に戻ろう。筆者は上級クラスに属していたが、主にオマーンのニュースに関するメディア教材、またアラブ詩や古典も同時に用い、授業の説明等は基本的にほぼ全部正則アラビア語で行われた。また筆者のクラスでは生徒は10人ほどで、学習歴が3~4年の人、またアラビア語を専攻している学生が多かったため全体のレベルとしても高いものであった。だが、何学期か続けて滞在している学生の話によれば、毎回生徒の数も変わるので生徒の全体的なレベル、授業のレベルなどもまちまちであるようだった。ちなみに、SQCのFacebookページでは、教室や、授業等の写真が沢山載っているので参照されたい。

次に滞在中の話をさせていただきたい。学生は皆、学校から車で十分ほどの



マスカット、マトラにて(筆者撮影)



寮周辺の道路(筆者撮影)



エクスカーショで訪れたシャルキーヤ地方のワディ・シャープ (筆者撮影)

寮に滞在することになるのだが、この寮の位置が、滞在中で一番大きな問題点であると感じた。というのも四方が岩砂漠で囲まれており、日用品を買いに行くにも車が必要で、地元の住民とも遭遇し話したりする機会があまりないためである。ただし、学校が週に二回、ニズワのショッピングモールLuluへ無料のシャトルバスを出してくれ、また学校が地域の学生をランゲージパートナーとして集め、我々に割り当ててくれ、彼らと授業後に話したりお互いの文化を紹介しあう機会なども設けられ、恒常的に退屈さを感じたりすることはなかった。なお、寮の中にはジムもあるので、運動が好きな人は楽しめるだろう。またこれに加え、金曜・土曜日の週末休みに合わせて首都マスカットやシャルキーヤなどへのエクスカーショもあったので、最初は寮、学校の立地に疑問を感じたがすぐに慣れていった。なお、毎年二月末から三月の頭にかけてマスカットでブックフェアが行われ、SQCからもエクスカーショの一環で訪れたが、オマーンだけでなく中東各国から本が集まるので、アラビア語学習者や中東・イスラーム史に興味がある人は何か良いものが見つけれられるかもしれない。

なお、食事に関して、オマーンは南アジアからの移民が多いこと、古くからの周辺地域との食文化の交流もあるためか、インド・パキスタン料理に近いものがオマーンのレストランでは多く提供されるが、寮のレストランに関しては、インド料理がメインで他には中東料理、ネパール料理などが出された。朝昼晩とビュッフェスタイルで味も個人的にかなり満足できるものであったが、油っこいものや肉類が多いせいもあり筆者は滞在中に五キロほど体重が増えてしまったので、今後SQCやオマーンに行く方がいらっしやれば気を付けていただきたいと思う。



カブサ、アラビア半島でよく食べられる米料理

オマーン滞在で感じた事

二か月の滞在を通じて、以下オマーンへの渡航やSQCでの留学を考えている方の参考になるよう、治安面、そして人の距離、アラビア語学習の場所としてのオマーン、という観点から述べていきたいと思う。まず治安に関しては、かなり安全な国であると筆者は感じた。中東、アラビア半島と聞くとテロや内戦など負のイメージが浮かんでしまう人も多いであろう。筆者も実際に現地を訪れるまでは、今までテロが起きていないだけでこれから起こりうるだろう、テロが起きなくても治安の面では日本と比べたら遥かに危ないのではないかと警戒していたが、いざ生活してみると個人的には日本並みに安全であると感じた。あくまで二か月だけの滞在であり、地域によっても差はあるし、将来的にどうなるかはわからないが、少なくとも現在は渡航に際して大きな問題はないと思われる。

また次に感じたこととして、比較的異文化に寛容であるということである。この理由として、古くから海上交易で大きな役割を果たし、外部との交流が多かったことを挙げる人もいるが、いずれにせよ外国人訪問者からすればこれはかなりありがたいことである。それとの関連なのか人と人との距離の近さが挙げられる。日本では近所づきあいですら近年廃れてきていると言われるが、オマーンでは近所の知り合いなどに限らず、見知らぬ外国人でもできるだけもてなし、助けようという意識を持っている人が多いように感じた。筆者も休日に街中をぶらぶらしていたら、街にいる人たちが急に呼び止め、しばらく話しているとはんに行こう、とレストランに連れて行ってくれることも、また、街中を手持無沙汰に歩いていると急に車が止まってくれ、「どこまで行きたいんだ、車に乗れ、私が連れて行ってやる」ということも日常茶飯事であり、筆

者は新鮮に感じた。もちろん、オマーン人、アラブ人だけがそうだというわけではなく、逆に彼らが皆寛容な精神を持っているというわけでもない。こういった行為がおもてなしの精神からでなく、何か他の物を求めて行く人もいないとは言えず、実際、筆者も一度だけ危険を感じたことがあった。人とのかわり度で過度な心配は不要だが、ある程度の緊張感を持って生活されたい。

また、近年中東各国でテロや内戦の問題が悪化する中で、湾岸諸国が安全にアラビア語を学べる場所であると考えられる人も増える一方で、オマーンを含む湾岸諸国は中東諸国の中でも特に非アラビア語話者の移民が多く、アラビア語を学ぶのにはあまり適さないという意見も多い。だが、筆者はフスハーに関していえば、どの国で学ぶかはあまり関係がないのではないかと感じた。というのも、日常生活でフスハーを話し言葉として使うような人は湾岸諸国に限らず、中東全体でもウラマーなど一部の人で、我々が日常生活で使おうとしても現地の人々から見たらかなり不自然であり、こちらがフスハーで話しかけても全く理解しない、または理解はするが向こうが喋れないので英語で話そうとする人々が多いのだ。このような状況下で我々外国人がフスハーを一番効率的に学べるのは、街中でも、アラブ人の家でもなく、アラビア語の学校であると筆者は個人的に思っており、よく言われることであるが、もしアラブ人の人々とコミュニケーションをとるためにアラビア語をやるのであれば、フスハーだけではなくアーンミーヤを学ぶことが大切である。もちろん、アーンミーヤを学びたいのならやはりたくさん現地の人と話すのが一番手取り早く、アラビア語話者の割合や数が少ない湾岸諸国は適していないかもしれない。だが、近年の中東での情勢悪化もあり、また湾岸諸国ではオマーンのアラビア語話者の割合は



オマーンのご都、ニズワ

比較的高い方なので、そういった観点からもこれから重要な国となっていくと思う。

おわりに

以上、SQCでアラビア語を学ぼうとした理由、学校生活、オマーン滞在を通じて思ったことを述べてきた。稚拙な文章ではあるが、今後オマーンを訪れる方、特にSQCに行こうと思われる方の参考になれば幸いである。

(2)「ダマスカスから、ここは日本」

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
博士前期課程
ミリヤム・アーザル

「日本語上手ですね！日本には長いんですか。」

「いいえ、一年ぐらいです。」

「ええ！一年でそんなに話せるんですね！すごいですね。」

このやり取りは日本に来た留学生なら誰もが経験したことがあるでしょう。留学生が自分の国で必死になって日本語を勉強してきたということを想像しない日本人が多いのは当然なのかもしれません。というのも、人間は母語を当たり前のもとするので、その面白さに気づくことが難しいからです。遠い国の人が自分の国の言語を一生懸命勉強する動機に考えがいたらないのでしょう。日本に来てから日本語を学び始めた留学生ももちろんいますが、日本語を出身国で勉強し、もっと上手になるために日本に来た留学生も多いのです。

様々な国の大学の日本語学科の学生たちが努力して日本語を話せるようになっています。一方で、ダマスカス大学の日本語学科に関して話させていただくのであれば、学生の努力のレベルが少し違うの

です。以下で、この点について述べたいと思います。まず、自分がなぜ日本語学科に入ったか説明します。そして、ダマスカス大学日本語学科がどんな学科なのか、最後に2011年に勃発し現在まで続くシリア紛争によって日本語学科の状況はどうやって変わったかを書きたいと思います。

まず、私が日本語を勉強することになった動機を述べる前にシリアの教育制度について説明しておきます。シリアの教育制度は、日本と同じように小学校六年、中学校三年、高校三年という段階に分けられます。高校まで無償で、中学校までが義務教育になっています。私が子供だった時は、小学校5年から英語を勉強し、中学校1年からフランス語を教える制度でした。しかしその後の制度改革によって、現在では英語の勉強は小学校一年生から始めるようになりました。また、国語であるアラビア語がとて大切な科目として扱われ、もしアラビア語が不合格の場合は、その学年の全部の科目が不合格となってしまいます。高校2年生の時に文系か科学系を選択します。大学には入学試験はありませんが、高校3年生の時に受ける最後の試験の結果によって、大学と専門を決めることができます。高校が科学系高校の場合、大学では科学系の専門はもちろん文系の専門も選べられます。ちなみに文系高校出身者は残念ながら科学系に進むことができません。毎年、学生の人数と合格率によって、大学と専門の要件が違います。例えば、ダマスカス大学の医学部の要件が238点（高校試験の満点は240点）の場合、この学部に入学するためには238点以上を取らなければなりません。シリアでは、国立大学の費用は無料と言えるほど安いので、競争がとて激しいのです。高校3年は「地獄」とも言われます。この一年で将来のことが全部決まるので、大学と専門を良く考えた上で決めなければなりません。

私は科学系高校を卒業したのですが、当時、経済学を選ぶか日本語を選ぶかで迷っていました。子供の時からコミュニケーションが好きで、英語もフランス語も楽しく学んできました。そして何とんでも、東アジアの文化や漢字をずっと不思議だと思っていました。日本語を勉強したら自分の好奇心を満たせるかもしれないとも思いました。一方で、経済学の場合は、ピ

ジネスも勉強できる上、勉強と直接関係している良い仕事が見つかりやすくなるのではないかとも思いました。

このようにして進路で迷っている時、友達とマアルーラというダマスカスの近くの古い町に、ボランティア活動に行く機会がありました。結果的にこのことが私の進路決定に大きなヒントを与えてくれました。この町にはとても古い教会があり、住民のほとんどは、いまでもイエスの時代の古い言葉であるアラム語を話します。アラム語の学校もあります。マアルーラは非常に有名なキリスト教の聖地なので、常にたくさんの観光客がいます。私たちは各地から集まる観光客に対応する修道女たちを手伝いに行きました。

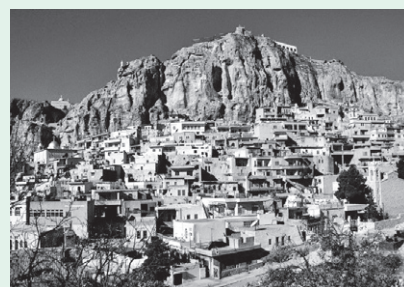
ボランティアをしていた時に、パスポートの件で困っていたフランス人の観光客がいて、修道女は英語もフランス語もあまりできなかったの、私は通訳し、彼らにマアルーラを案内しました。そのとき、自分がこの人とコミュニケーションをとれて、手伝えてすごく幸せで、日本語を勉強したら、これからもそういう経験がたくさんあると思い、日本語学科に入りました。

シリアと日本の関係を深くするため、2003年にダマスカス大学の人文社会科学部に日本語学科が開かれました。日本語学科は人文社会科学部の他の学科とはシステムが異なり、また学生が比較的に少なく、シリア人で日本語を教える資格を持っている人がほとんどいないため、教員全員が日本人です。私が入学した時点（2010年9月）で、一緒に入学した学生数は30人でした。毎日授業があり、出席は80パーセント以下になると進級できないシステムでした。ところが、ダマスカス大学の英語学科は同年に4000人が入学して、最後のテストと課題提出をさえすれば進級ができるシステムでした。

一緒に入学した学生は30人だけでしたが、それぞれに出身地が異なり、バックグ



ダマスカス大学



マアルーラ

ラウンドは様々でした。シリア国内出身者だけではなく、パレスチナの難民も、イラク人も、クルド民族の人もいました。シリア人にとって、人文社会科学部は学生が多く、出席するクラスとグループによって卒業するまで様々な人と出会ったり、会わなかったりするし、個人で勉強し、毎日学校に通わなくてもいいというイメージがあります。

ところが、日本語学科だと、一緒に入学した人達に毎日会ったり、一緒に課題したりするべきということになっているので、意見や考え方が違って、楽しい4年間を過ごしたいものなら、仲良くし、お互いをもっとわかり合わなければならないのです。そういうことを嫌がる人もいますが、人間関係に興味を持っている私にはとても興味深いと思いながら、皆と楽しい大学生の日々を過ごしました。

クラスはおじきではじまり、おじきで終わりました。クラスではアラビア語と英語を使わずに、非常に優しい先生たちに日本語を教えていただきました。先生の説明を聞いていると、まるで国境を越え、日本にいるような感覚になりました。それをきっかけにして、日本語をすごく好きになり、ネイティブレベルの日本語能力を目指して日本に留学したいと思いました。あの時、日本語学科では留学奨学金を通じて3、4人が一年の留学と50日間の留学ができました。この奨学金を取れるのはクラスの優秀な人のみでした。また、もっとも優秀な人は卒業後すぐにダマスカス大学で勤められ、一年ぐらいい仕事した上で博士号取得のために留学できる制度もありました。私は一年間留学の奨学金を目指して、毎日勉強したり、シリアで留学している日本人にできるだけ話しかけたりして、一年生の一位になりました。しかし、残念ながら、計画通りにならなかったのです。

2011年3月にシリアでいわゆる「アラブの春」が起こり、シリアが危なくなり、5月には日本人の教員が大使館の命令に従ってシリアから避難することになりました。国の状態はもちろん、日本語学科の状態も非常に混乱し、日本人の教員がいなくなり、日本大使館も閉鎖されました。日本語を使う仕事に就くのが難しくなった状態で、「日本語学科を開き続ける意味があるか」という恐れは皆の頭に浮かんでいました。



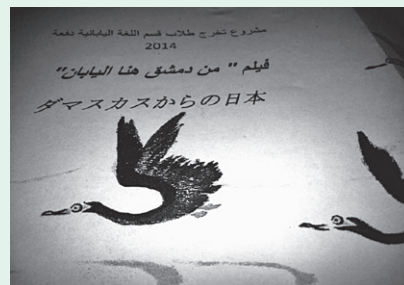
大学は日本語学科を続ける決断をしました。日本語学科の卒業生たちが教員の役割を勤め、新しい学科長も勤めました。しかし、その年は、新しい学生を受け入れませんでした。それを聞いて、皆が日本語の勉強を続けるということを大喜びでしたが、これからのことは不安という感覚がまだ強かったです。しかも、状態によって、奨学金で日本に行ける人が一人しかいないという状態になり、学科長が3年生の先輩を2年生の私達より優先して日本に送りました。新しい教員の中で、日本人の教員がいた時に少しだけアシスタントをしました二人がいましたが、彼らも卒業したばかりだし、教える経験もないし、日本で一年間を過ごした人もいしましたが、まだ行っていない人もいたわけです。そういうことで、不安の気持ちは学生に限らず、教員にとっても結構大変でした。

日本語学科では一番被害を受けたのは私達のクラスだと今でも思います。なぜかというと、一年生を終わったばかりでまだまだ日本語の基本しかできないのに、日本人に会えなく、日本語の小説などまだ読めず、ドラマやアニメなども手にはいりにくい状態でした。国の状態が危なく、遠いところに住んでいる人達は大学に来られなくなったり、遅くまで授業ができなくなりました。学生の間で政治の意見のせいでけんかが多くなり、クラスの雰囲気が悪くなった時期もありました。国を出たり、危ない場所に住んでいた学生たちは毎日来られなくなり、クラスの皆に追いつくことができなくなってやめた人もいました。しかも、新入生がいなかったため、不合格になったら、一人で勉強しなければならないということになってしまいました。次の年に、新しい学生が受け入れられました。4年生の先輩と3年生になった私達と新しく入った1年生がいました。しかし、日本語学科用の教室が二つしかなくて、遠く住んでいる人が多かったこともあり、朝と夜のシフトのシステム

もできなくなって、一つのクラスがダマスカス大学の他のキャンパスに移動することになりました。一年生はまだ大学の生活になれていなく、4年生は卒業をひかえていたため、私達が移動することになりました。さらに日本の文部科学省の奨学金が止められ、日本にいける機会がほとんどなくなりました。このような最悪の状況下でも、東京外国語大学はまだダマスカス大学と関係があり、日本語学科の推薦で一人が奨学金を取ることになりました。しかし、学長はもう一度、先輩を優先して送ったのです。結局、4年生になり、誰も日本に留学できず、クラスには10人しか残っていませんでした。

卒業論文は卒業生の教員だと担当できませんでした。とはいえ、せっかくクラスはここまで頑張ってきたので、一人の教員と一緒に、「みんなに見せられる、卒業しても残る」映画を作ろうと決めました。タイトルは『ダマスカスからの日本 *من دمشق هنا اليابان*』です。これは中東戦争時に破壊された、エジプトのラジオ網の代替として放送されたシリアのラジオが、「ダマスカスからのカイロ」というセリフからプログラムを始めたことに対するオマージュでもあります。ダマスカス大学の日本語学科の生活や私達の目から見た日本の文化を日本語で様々な場面を通じて紹介しました。時間があまりなかったため、皆で10日間で書き、撮影し、監督して終わりました。最終的に卒業できたのは8人だけでした。

『ダマスカスからの日本 *من دمشق هنا اليابان*』は、日本と日本語に興味がある若者たちが作った普通の学生映画と思われるかもしれませんが、しかし私達にとっては四年間諦めずに頑張り続けてきた努力の結晶なのです。ダマスカス大学日本語学科は現在の学生が卒業したらなくなってしまいましたが、私達の意志、友情、夢が注ぎ込まれたこの映画を私は今でも誇りに思っています。



9. そのほかの便り

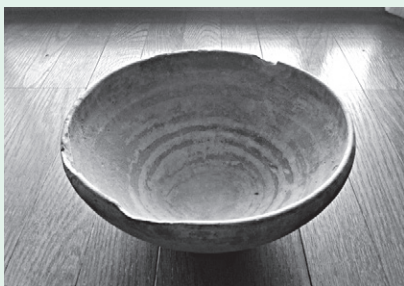
(1) 日本・オマーン協会会員の駒場博物館 オマーン展「Omani Corner at Komaba」 等訪問

2016年5月11日に、日本・オマーン協会理事長の大森敬治氏をはじめとする8名の会員が、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部付属の駒場博物館1階ロビー内に設置されたオマーン展「Omani Corner at Komaba」の参観と、ちょうど見ごろのカーブス・ローズの見学のために、東京大学駒場キャンパスを訪問されました。天気にも恵まれ、カーブス・ローズも大変美しく皆さん喜んでくださいました。また、会員のかたがたと、オマーンの歴史と文化の豊かさを話し合い、現代中東および世界の情勢に関する興味深い意見交換も行うことができました。



(2) 日本・オマーン協会からのオマーン 関係遺物の受託

2016年5月に、一般財団法人日本・オマーン協会より、ニズワにて入手された古い器3点と陶器の瓶1点と、オマーンの伝統的な腰帯短剣（ハンジャル）を受託し、駒場博物館のオマーン展にて近日中に展示することになりました。大変貴重な資料の受託・展示をご提案くださった協会関係者の皆様と、展示に協力して下さっている本学駒場博物館助教の折茂克哉さんに、厚くお礼申し上げます。



(3) サウジアラビア・キングファイサル センター関係者来校

2016年7月20日に、サウジアラビア・キングファイサルセンターから、研究部長サウード・アル・サルハン博士、副部長のヌーラ・ビント・トルキー・アル・サウド王女とほか一名が、東京大学駒場キャンパスに来校され、本学総合文化研究科長の小川桂一郎教授、副研究科長の石井淳教授および、中東地域研究センターの教員、本学東洋文化研究所の西アジア研究部門の教員と会談を行い、今後の研究協力関係について話し合いました。



●UTCMEs スタッフ紹介 (平成28年9月30日現在)

〈スタッフ〉

杉田 英明 (センター長、兼務教授)
森元 誠二 (客員教授)
辻上 奈美江 (特任准教授)
瀬口 美加 (事務補佐員)

長澤 榮治 (副センター長、兼務教授)
高橋 英海 (兼務教授)
阿部 尚史 (特任助教)

〈UTCMEs 運営委員〉

杉田 英明 (委員長、大学院総合文化研究科教授)
羽田 正 (理事・副学長、東洋文化研究所教授)
矢口 祐人 (大学院総合文化研究科教授)
高橋 英海 (大学院総合文化研究科教授)

長澤 榮治 (東洋文化研究所教授)
石田 淳 (大学院総合文化研究科教授)
菊地 達也 (大学院人文社会系研究科准教授)

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

杉田 英明 (委員長)
西崎 文子 (大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長)
矢口 祐人

石田 淳
松尾 基之 (大学院総合文化研究科教授)
高橋 英海

●発行者情報 UTCMEs ニュースレター VOL.9 平成28年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMEs/>

印刷：JTB印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0900 FAX：03-5715-0909